

学習意欲を高める授業構成に関する研究

— 優れた小学校教師による実践の分析を通して —

小原友行・澤口陽彦・野村晃弘・吉野功祐
(2011年12月2日受理)

A Study on the Lesson Construction for Enhancing the Learning Motivation: through Analyzing Teaching Practices by Excellent Elementary Teachers

Tomoyuki KOBARA, Haruhiko SAWAGUCHI, Akihiro NOMURA and Kosuke YOSHINO

Abstract. The aim of this paper is to examine about the lesson construction for enhancing the learning motivation through analyzing teaching practices by excellent elementary teachers. The result of analyzing is the following three.

- 1) Teacher must develop the lesson plan for enhancing the learning motivation. Because, this is one of the objectives and important goal of self-learning in classroom.
- 2) Teacher need to prepare the instructional material and questions for enhancing the learning motivation in classroom lesson.
- 3) In the lesson, teacher must make the learning environment and cooperative formation and activities by children.

1 本研究の目的と方法

本研究は、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期における2011年度前期の授業科目「初等教科学習開発特論(社会)」の中で行われた、優れた小学校教師による授業実践の分析を通して学習意欲を高める授業構成の在り方を解明しようとした研究の成果を報告するものである。

学習意欲に関しては、2007(平成19)年に改正された学校教育法第30条第2項で次のように規定されたこともあり、その育成は学校教育における今日的な課題の一つとなっている。

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」

では、どのような授業構成を行えば学習意欲を高めることができるのであろうか。また、優れた教師はどのような授業構成によって学習意欲を高めているのであろうか。

このような問題意識から、以下では、経験豊富

な小学校教師である京谷志穂教諭(東広島市立原小学校)と三田幸司教諭(広島大学附属三原小学校)、長野由知教諭(広島大学附属三原小学校)と中田晋介教諭(広島大学附属小学校)、佐和真由美教諭(広島大学附属東雲小学校)の実践を取り上げ¹⁾、学習意欲を高める授業構成の視点から、各実践の授業構成の特色とその背後にある授業理論を中心に考察を行った、受講者3名による分析結果について報告していきたい。

(文責:小原)

2 「自己決定理論」を取り入れた授業構成 ～京谷志穂・三田幸司実践の場合～

(1) 授業実践の概要

- ① 小学校6年社会科「文化と学問から江戸時代を探る～江戸の文化と新しい学問～」

(京谷志穂教諭)

ア 単元について

本単元は学習指導要領(平成20年度改定)社会科第6学年内容(1)のウに該当する。本単元は、江戸時代末期に平和が続く社会が安定するに伴って庶民が力を付け、文化に親し

む人が増えて町人の文化が栄えたこと、新しい学問の発展とその広がりによって幕末の政治に大きな影響を与えたことの2点を捉えることをねらいとしている。

指導計画（全7時・各1時間）

第一次・江戸の町の様々な場面から、街の人々の生活の様子について気付いたことを出し合う。

- ・何を調べたら江戸時代の文化の特徴が分かるか考え、課題を持つ。

第二次・歌舞伎が人々の間に広まっていった理由を、資料から読み取り、豊かになった人々の楽しみの一つとして広まったことをとらえる。

- ・浮世絵は、多色刷りの版画という技法によって多くの人々に広まったことをとらえる。（本時）
- ・蘭学は各分野の発展に役立ち、幕府の政治批判にもつながったことをとらえる。
- ・国学が広まり、幕府の政治に影響を与えたことをとらえる。

第三次・江戸時代に町人の文化が栄え、新しい学問が広まり、これらの文化や学問が社会の影響を受けたり社会に影響を与えたりしていることを短歌で表現する。

（校内研修資料をもとに筆者が作成）

イ 授業の実際

本授業は、「多色刷りの版面という技法や描かれているものなどの浮世絵の特徴から、町人の文化の一つとして多くの人々に広まっていった理由を考えることができる」を目標に行われた。まず、前時の復習として、歌舞伎の魅力を確認し、本時は絵画の特徴を見ることで、江戸時代の特徴を見ることを伝えた。これまでの時代でも絵画は学習しているので、室町時代の水墨画や安土・桃山時代の金屏風などの特徴を押さえ、その共通性である、「武士や一部の豪商の文化であった」ことや、「一枚一枚独自のものであった」ということに気付かせた。その後、江戸時代は「浮世絵」

であることを押さえ、「浮世絵」の特徴とはどのようなものかを知ることが江戸時代を知る手がかりになるとした。浮世絵は図画工作の授業で学習・模写しており、児童は浮世絵に関する知識は豊富なので、有名な浮世絵を挙げさせた。児童からは「葛飾北斎」や「写楽」などの作者名や、「富嶽三十六景」などの作品名が出た。「東海道五十三次」が出たところで、当時の江戸の人口100万人に対して、200万枚売れたという事実を提示し、「なぜ浮世絵が人々の間に広まったのか秘密を探ろう」を本時のめあてとした。その後、浮世絵を見ながら他の時代の絵画の特徴を見たときと同じ、「色使い、イメージ」、「描かれているもの」、「作成方法」の3点を確認した。そして、「どこでどう使われたか」、「買い手は誰か」を中心に、「なぜ広まったのか」を個人で考え、数分後にグループで意見交換をした。意見交換を終えたところで、全体で交流し、大量生産が可能で安価であったことや役者絵などの絵の内容などの意見が出された。それを元に、最後に児童に読売になりきらせ、浮世絵が広まった理由について考えさせ、発表させた。

② 小学校4年理科「電気の働き」（三田幸司教諭）

ア 単元について

本単元の目標は以下の4点である。

- 乾電池の直列つなぎと並列つなぎでは豆電球の明るさが異なる理由を、自分なりに見通しを持って追求していこうとする態度を育てる。
- 乾電池を直列につないだ場合と並列につないだ場合について、回路を流れる電流の強さの違いに対する見方や考え方を養う。
- 豆電球の明るさやモーターが回る方向の違いを、回路を流れる電流の強さや方向と関連付けながら調べて記録できるようにする。
- 光電池は光エネルギーを電気エネルギーに変換することを理解できるようにする。

指導計画（全12時）

第1次・乾電池2本なのになぜ豆電球は明るくならないのか（1時間・本時）

- 第2次・電流の流れ方の特徴を調べる実験と交流（5時間）
 ・グループ作りと実験の計画、準備（2時間）
 ・実験と結果交流（3時間）
 第3次・確かめの実験，電流の強さと方向調べ（3時間）
 第4次・扇風機作りと光電池の実験（3時間）
 （授業公開資料をもとに筆者が作成）

イ 授業の実際

本授業は、「乾電池の並列つなぎと直列つなぎの回路や豆電球の明るさを比較することを通して、二つの回路の電流の流れ方の違いについて考えをもつとともに、検証実験への見通しをもつ」を目標に行われた。まず、教卓に児童を集め、前年度の「豆電球」の復習として、乾電池1つで豆電球をつけた。そのまま、乾電池が2つになった場合について、「直列つなぎ」、「並列つなぎ」の二通りの回路を確認し、豆電球の明るさを比べることで、並列つなぎでは豆電球は明るくならないことを確認し、「並列つなぎが明るくならないのはなぜか」を考えさせた。その場でいくらか意見を出させた後、机につかせ、一人ひとりにワークシートを手渡した。このとき、特に考えるようには伝えていないが、児童は配られたワークシートに個人の考えを書いている。三田教諭はここで学習課題の「並列つなぎでは豆電球が明るくならない理由を考える」を板書した。そこから、グループで交流10分、記録（個人思考）、全体での交流の流れで授業を行うこと、また、グループで意見を一つにまとめる必要がないこと、いろいろな「説」が出たら、それぞれ確かめることを伝えた。本授業においては「説」と「方式」という言葉が採用されているが、これはそれぞれ原因と検証方法に相当する。この後、グループで話し合いの時間になる。このとき、いくらかのグループに分かれて話し合っているものの、個々の児童がどのグループに属するかは決まっていない「フリータイム」での交流（三田，2009）であるため、児童は同じところにとどまらず、流動的にグループを構

築、解体しながら、自分の考えを深めている。所定の時間が来たら、全員が席に戻り、全体での交流を行った。その後、次時の学習課題が「並列つなぎでは豆電球が明るくならない理由を確かめる」であることを確認し、授業を終えた。

(2) 学習意欲を高める理論

ここでは、学習意欲を心理学の「動機づけ」と考え、現在動機づけ現象全般に関わる理論として注目されている、DeciとRyanによる「自己決定理論」（Deci & Ryan, 2002）をもとに両実践を分析する。

① 「自己決定理論」における3つの欲求

自己決定理論では、周囲の環境や他者とかかわりをもっていく中で自身の有能さを感じたいという「有能さへの欲求」、他者やコミュニティとかかわろうとする「関係性への欲求」、行為を自ら起こそうとする「自律性への欲求」の3つの欲求が同時に満たされるような条件のもとで人は動機づけられるとして、これを検討するとき、構造、自律性支援、関与という3つの観点の重要性を挙げている（鹿毛，2004）。以下、この3観点に基づき、具体的に授業を分析する。

② 「有能さへの欲求」充足のための「構造化」

有能さへの欲求を満たすために、当人にとって意味のある情報が整理されて提示されるような構造化された環境が必要であるとされている（鹿毛，2004）。京谷実践では、始めに浮世絵の特徴を、「色使い、イメージ」、「描かれているもの」、「作成方法」の3点で確認し、その後、「どこでどのように」「なぜ」広まったのかを考えさせている。三田実践では、前年度の学習内容から、「輪」ができていないと回路として完成されないことなどが確認されたとともに、新しい学習内容である「直列つなぎ」、「並列つなぎ」に関しては授業の冒頭で三田教諭によって教えられ、その後「なぜ」を考えさせている。両実践とも、考えるべきところは限定されており、その前に前時の復習や、新しい学習事項を確認することによって、個人思考をする場面までに必要な情報が整理して提示され、有能さへの欲求が満たされているといえる。さらに京谷

実践においては、既習事項の確認などスモールステップでの教師による質問が多く、手を挙げて発表することが容易になっている。これは課題の脅威を下げることによって挙手発言をさせ、成功体験を積み重ねることによって、自己効力感(＝有能さ)を高めているといえる。

③ 「関係性の欲求」充足のための「関与」

関係性への欲求を満たすために、当人に対する知識、関心、情緒的なサポートといった関与が必要であるとされている(鹿毛, 2004)。両実践とも、個人思考、交流、個人思考という流れを採用しており、京谷実践においては「近くの人と交流」、三田実践においては「フリートイム」という交流の時間が設けられている。このように相互に意見を交流する中で、関係性の欲求が満たされているといえる。

④ 「自律性への欲求」充足のための自律性支援

自立性への欲求を満たすために、当人の意思が尊重されるような環境によって、選択の機会の提供が必要であるとされている(鹿毛, 2004)。京谷実践のまとめである読売の「かわら版」は、全体での交流を踏まえての「自分の考え」であり、また、三田実践においても交流の目的はグループの意見を一つにまとめることではなく、自分の考えを持つことと再三言われており、両実践とも人と意見は交わすが、最後は自分の意見を自己決定するという授業の流れになっており、自律性への欲求が満たされているといえる。また、三田実践においては次時も、自己決定した実験方法について、同じ実験方法同士でグループを作り実験をするということで、選択の機会、自己決定の機会が保障されている。これにより、単元単位で自律性への欲求が充足されているといえる。

(3) 学習意欲を高める授業方法の提案

これらの内容から、ここでは、学習意欲を高める授業方法として3つの要素の提案を行う。

まず、授業のねらいとなる中心発問において必要な情報を、授業の前段階で効果的に提示・確認することで、有能さへの欲求を高めることが重要である。さらに、一問一答式の既習事項の確認などによって、授業そのものへの有能感も高めることができる。次に、他者と関わる場面を設定する

ことで、関係性への欲求を満たすことである。このとき、話し合いが円滑になるよう、隣同士、班での交流、自由な交流など目的や児童の実態に応じて形態を工夫する必要がある。最後に、児童一人ひとりの自律的な思考を保障し、「自分の考え」を持たせることによって自己決定場面を作り、自律性への欲求を高めることが重要である。

これら3つの要素を授業に組み込むことによって、学習意欲を高める授業を創造することができる。²⁾

(文責：澤口)

3 知的好奇心を喚起する授業構成

～長野由知・中田晋介実践の場合～

(1) 授業実践の概要

① 小学校3年社会科「どうして? どうなる? イチクミ屋」(長野由知教諭)

長野教諭による小学校3年社会科「どうして? どうなる? イチクミ屋」の授業は、全11時間の計画で行われている。³⁾ここでは、単元の最終時の授業を分析の対象とした。第1次では単元を通じた学習計画をたて、第2次では身近なスーパーの見学などを通して調べ学習を行っている。第3次では分析対象とした授業の前に、高齢化社会についての学習を行っている。

本授業は、「驚きを引き出すことができるような資料提示を工夫しながら、近い未来における販売業の在り方を推理させることで、社会変化や地域の人々の様子といった社会的要因と結びつけながら考える習慣を身につけさせる」ことを目標に行われている。まず前時の振り返りをした後、イチクミ屋は高齢化社会でどのように変化すればいいだろうという学習課題を設定している。その後、ネットスーパーや「ようふさん」が営む小売店の宅配サービスの便利さについての話し合いが行われた後、これからの販売業の在り方について児童が考えるというように展開する。

また、教師がさまざまな資料の提示や発問をすることによって授業を展開していく中で、児童のほとんどが積極的に発言を行うことができていた。

そして、授業中に実際にネットスーパーで注

文した商品が学級に宅配されたり、小売店からの営業の電話がかかってきたりするなど資料提示の工夫がなされている。

② 小学校3年理科「じしゃくにつけよう」
(中田晋介教諭)

中田教諭による小学校3年理科「じしゃくにつけよう」の授業は、全17時間の計画で行われている。ここでは、第3次3時間目の授業を分析の対象とした。単元目標と指導計画は表のとおりである。⁴⁾

指導目標

- 自分なりの課題をもって、磁石の働きを調べることで、磁石の性質についてこれまでのジブの考えが強化されたり、修正されたりしたことに気付くことができる。(自分知)
- 物の性質を比較しながら調べたり、曲と曲との作用を調べたりしたことを交流することができる。(方法知)
- 磁石を使い、磁石の働きを調べることで磁石の性質について考えることができる。(科学知)

指導計画

- 第1次 磁石にくっつくもの(4)
- 第2次 磁石の力(2)
- 第3次 磁石の極の性質(7) 本時3/7
- 第4次 磁石づくり(2)
- 第5次 作ってみよう(2)

授業は、前時に磁石が割れてしまったことから、磁石は割れても極を持つのかという疑問を解決する形で展開する。授業ではまず、割れた磁石がどのような極を持っているのかについての、それぞれの仮説が発表される。次に、教師が示した「だれがやっても、だれがみても、いつやっても同じ結果になる」という条件を基に、児童はそれぞれの仮説を検証できるような方法を考え実験を行い、結果について交流するという風に展開されている。児童は、仮説を発表する場面でも、その後の実験結果を交流する場面でも活発に発言して考えを深めることができていた。

(2) 授業実践の特色

① 長野由知実践の授業の特色

長野教諭の授業では、地域のスーパーや「ようふさん」という具体的な人物が児童にとって具体的で身近な教材として登場したり、さらに教室に宅配便が届いたりするなど工夫された教材提示が行われていたことと、児童が積極的に授業に参加し、活発に発言をしていた点に特徴がある。教師の教材提示の工夫が、授業そのものに対する児童の学習意欲を引き出していたといえる。

また、授業の展開は、教師が次々と提示する教材に対して、児童が自由に意見を発表するという展開となっている。その結果、単に販売の工夫を知るのではなく、「お店がお客のところへ行く時代からお客がお店に来る時代へ、さらにまたお店がお客のところへ行く時代へ」というように社会の変化について理解することが出来る授業となっている。「郊外型スーパー」「ネットスーパー」「無店舗販売」という教材の提示の順序は、各要素を関連付けて考えることによってしか得られない「社会の変化」という高次の知識を得ることができるようにするためのものであったといえる。

② 中田晋介実践の授業の特色

中田教諭の3年「じしゃくにつけよう」の授業では、割れた磁石の磁極はどうなるのだろうかという、児童が持つ知識では説明することができないという認知的不協和を引き起こす疑問と、実験方法を児童一人ひとりが主体的に自分で考え検証するという授業の展開に特徴がある。教師の的確な問題設定によって、授業そのものに対する児童の学習意欲が引き出されていたといえる。

また授業では、児童一人ひとりがそれぞれの仮説を検証する実験を行った結果、授業の終局では、磁石は割れても磁極を持っているということを児童全員が理解することができていた。授業のなかで行った、各自の学習活動が有効に機能していたことを、児童一人ひとりが実感することができるようになっていたといえることができる。

(3) 学習意欲を高める授業理論

学習意欲には、人間本来の「知りたい」「調べたい」といった知的好奇心という側面と、積極的に発言したり課題をこなしたりするなど授業の中で行われる様々な活動そのものに対する意欲という2つの側面が考えられる。

長野教諭の授業では、教材提示の工夫による授業への動機づけと、授業に参加することによってしか得られない高次の知識を児童が学習することができるようにすることによって学習意欲を高めようとしていた。また、中田教諭の授業では、認知的不協和による授業への動機づけと、各自の学習活動の成就感によって学習意欲を高めようとしていた。どちらも授業そのものに対する動機づけと、学習活動が有効であったことを実感できるような工夫によって、児童の知的好奇心を高めようとしていたといえる。

ここで、両者の違いは、それぞれの学校が目指す子ども像の違いが影響していると考えられる。

附属三原小学校では、社会科の目指す子ども像として「自分の思考をより科学的なものへと再構成していくこと」ができることを設定している。このため、長野実践においては、個別事例的な学習ではなく、関連づけ解釈することによってしか理解することができない授業の展開となったと考えられる。また、附属小学校には、指導目標を自分知・方法知・科学知の観点から設定するという特色がある。このため、中田実践においては、自分で考えた仮説を自分で検証するという授業の展開となったと考えられる。

(文責：野村)

4 達成感を重視した授業構成

～佐和真由美実践の場合～

(1) 授業実践の概要～小学校1年生活科「がっこうたんけんでござ～」～

分析の対象として、佐和真由美教諭の小学校1年生活科の実践「がっこうたんけんでござ～」(2002年度)を取り上げる。⁵⁾

2002年度の広島大学附属東雲小学校の研究主題は「自立に向かう子どもたち」であった。自立への基礎を養うことは、生活科の大きな目標でもある。小学校学習指導要領解説生活編では、生活科における「自立」を以下の3つにまとめている。

○学習上の自立

○生活上の自立

○精神的な自立

その中で佐和教諭が「自立」という観点から、目指す子ども像として、以下の3点に焦点を当てている。

ア 人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども

イ 自分や友達のしたこと(していること)をふりかえる子ども

ウ 生活科で活動したことを基に、自分の生活を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども

佐和教諭は、子どもたち自身が「～したい。」という思いをもち、自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で、人やものと関わり合いながら、自分の活動を豊かにしていけるような実践を行っている。本実践「がっこうたんけんでござ～」の概要は以下の通りである。

単元全体のねらい

○自分なりのめあてをもって、進んで探検することができるようにする。

○探検して発見したことを自分なりに工夫して表現することができるようにする。

○学校の施設や人々と自分とのかかわりに気づくことができるようにする。

単元計画(全19時間)

第一次 がっこうって、どんなところ? 1時間

第二次 がっこうたんけんでござ～

春・夏の巻 6時間

第三次 がっこうたんけんでござ～

秋の巻 6時間

第四次 がっこうたんけんでござ～

冬の巻 4時間

第五次 まとめ 2時間

第一次では、全員で学校探検を行っている。入学時の一年生の児童にとって学校という場所は新たな場所であるとともに、今後6年間生活する場所でもあり強い興味を持っているようである。第二次から第四次では、探検と発表会をセットとして活動を行っている。季節ごとに子ども自身が自分なりにめあてをもって学校探検を行い、その後

見つけたことを全体で共有するという流れになっている。

このように本単元では、年間を通して繰り返し活動ができるような計画を立て、活動時に人やものに関わり合えるような場を設定することで、学習意欲を喚起させようとしていると考えられる。繰り返し活動を行い対象と関わることで、子どもたちの中に様々な気づきや疑問が生まれる。子どもたちに新たな疑問が生まれれば、それを探求しようという意欲が生まれる。しかしそれがすぐに解決できるような疑問であれば、その意欲は短期間のものに過ぎない。本単元では子どもの疑問が自分で少し考えれば分かる疑問から、誰かに聞いたり時間を変えて調べるなどしなければ分からないような疑問に子どもの関心が少しずつ移っているようである。そして、すぐに解決できない問題について自分なりに考え始めるのである。

たとえば本実践の第三次の中では、一人の子どもが見つけた「トイレのスリッパの数と大きさはなぜ違うのか?」という、一見ただけでは分からない疑問について子どもたち全員を関わらせて授業を展開している。他にも階段や消火栓の数や事務室の役目にも目を向けながら単元を進めている。

(2) 学習意欲を高めるための手立て

学習意欲が高まっている授業とは、子どもの中に「もっと知りたい」、「もっと学びたい」という感情が生まれる授業であると考えられる。子どもたちが授業の中で「この課題ができるようになった」、「この問題が分かった」という達成感を味わうことが出来れば、子どもたちは「自分でできた」という自信を持つことができ、その自信が「もっと知りたい」「もっと学びたい」という学ぶ姿勢につながるものと考えられる。

本単元の中で佐和教諭は、子どもに達成感を味わわせるために、以下の2つの手立てを講じていると考えられる。

① 繰り返し学習対象に触れられるような単元計画を構成する

本実践では、子どもの活動にじっくりと時間をかけるために年間を通しての単元計画を立てている。また本実践では生活科だけではなく、国語科や算数科といった他教科との関連も図っ

ている。学習対象に関わる中で、自分の思っていたような結果にならない場面が数多く生まれる。年間を通して繰り返し活動を行わせていく中で、子どもたちは前回までの活動や季節の変化等を比較しながら対象に関わっていく。そして次はどのように対象を見ていけばよいのか、どのように調べていけばよいのかという学習方法を子ども自身が見つけることができる。学習方法を見つけ課題を解決できたという達成感が子どもの自信となり、学習意欲の高まりにつながると思われる。

② 子どもの刺激となるような学習環境を整える 学習環境づくりについては大きく2つの場面の設定が考えられる。

一つ目は探検後の子どもの発表(疑問)を共有する場面である。この場面は、他者の発表の良さに気づき自分の活動を振り返る機会とする必要がある。他者との関わりの中で、「他の友達はこの方法でこのようなことを発見したんだ」、「次は友達のこの調べ方を真似してみよう」という気持ちが生まれ、少しずつ自分のものにすることができる。そこで教師は、子どもが調べてみたいと思うような発表(疑問)を抽出して授業を展開していく必要がある。そのためには、教師が事前に子どもがどのようなことを疑問として持っているのかを把握する必要がある。

二つ目は教室の後ろの壁に探検における子どもの発見や疑問を書いたカードを貼ったり、授業中机の上に教室に見立てた箱を配置し発見したことを書いたカードを入れるというように、常に学習対象を意識させるような環境の工夫を行っている場面である。授業内外にかかわらず友達の発見や疑問に触れさせることで、「友達はこんな発見をしていたのか、今度自分も見に行ってみよう」、「友達はこの方法でやったのなら、自分はこの方法でやってみよう」というような意欲を喚起させようとしている。

以上の2点のように、学習課題の解決方法を教師に教えられるのではなく、他者(友達)との関わり等の中で自らが見つめることができるような手立てを講じれば、自ら課題を解決しようという姿勢を身につけさせることができ、学習意欲につながるものと考えられる。そのために教

師が授業内外に関係なく、学習を意識させるような学習環境づくりに努力を重ねていかなければならないということになる。

(文責：吉野)

5 成果とまとめ

本稿では、京谷志穂教諭（社会科）と三田幸司教諭（理科）、長野由知教諭（社会科）と中田晋介教諭（理科）、そして佐和真由美教諭（生活科）の小学校における実践を取り上げ、学習意欲を高める授業構成の視点から考察を行ってきた。5名の教諭に共通する授業実践の特色は何であろうか。研究の成果をまとめると、次の3点を指摘することができよう。

第1は、学習意欲の育成それ自身を学習目標として重視されていることである。具体的には、学習意欲を高める授業構成において、導入部での意欲づけという単なる手段としてではなく、目標そのものとして位置づけ、それを高める授業づくりを試みられていることである。

第2は、学習意欲を高めるために、学習材とそれに対して用意される発問を工夫していることである。知的好奇心を喚起させたり、認知的不協和を起こすような学習材との出会わせ方を工夫されている。また、調べてみたい、やってみいたいという課題意識を大切にされている。

そして第3は、交流の時間や話し合いを取り入れるなど、子どもたち同士の協同（協働）的な学び合いという学習形態や学習活動を重視されていることである。

(文責：小原)

【注】

- 1) 所属は授業実践当時のものである。
- 2) 考察に当たっては、次の文献を参考にした。
鹿毛雅治『「動機づけ研究」へのいざない』上淵寿編『動機づけ研究の最前線』北大路書房、2004。
三田幸司「子どもと教師の思いのズレから探る話し合い活動の工夫」日本理科教育学会編『理科の教育』2009年11月号、p.p.12-14。
Deci, E.L. & Ryan, R.M., Handbook of Self-termination Research. Tochester, NY: The University of Rochester Press, 2002。

- 3) 広島大学附属三原学校園『平成22年度幼小中一貫教育研究会幼小中一貫の教育力を生かした創造的問題解決能力の育成～国際的資質としての人間関係力を基盤として～』2010, p.50。
- 4) 中田晋介「子どもの学習の場を保障する理科授業づくり」学校教育研究会『学校教育』を基に筆者作成。
- 5) 考察に当たっては、次の文献を参考にした。佐和真由美「5生活科〈Ⅱ各教科・領域の実践〉〈生活科〉」広島大学附属東雲小学校『研究紀要』2003, pp.73-75。同「かかわりを深める生活科学習:第1学年「学校探検でござ～」の実践を通して〈Ⅱ各教科・領域の実践〉〈生活科〉」広島大学附属東雲小学校『研究紀要』2003, pp.76-80。